第30回（最終回）

金春康之演能会

人間憂いの花ざかり
無常の嵐音添い…
げに目の前の浮世かな

面影も幻も
見えつ隠れつするほどに
東雲の空もほのぼのと明け行けば
あと絶えて
わが子と見えしは
塚の上の草

仕舞　弓八幡　本田芳樹

仕舞　笠ノ段　佐藤俊之

仕舞　采女　櫻間金記

仕舞　野守　金春穂高

一調　小塩　金春安明　上田慎也

狂言　昆布売　善竹隆平　善竹彌五郎

能　角田川（すみだがわ）　金春康之ほか

二〇二四年五月十二日（日）
午後二時～五時

●全席指定＝正　面　五五〇〇円　脇正面　四五〇〇円
中正面　三五〇〇円　学　生　二五〇〇円
●お問い合わせ＝金春康之後援会事務局（10時～17時）
TEL／FAX　〇七四三―五六―三一六九

奈良春日野国際フォーラム　甍

主催　金春康之後援会・桃心会
後援　奈良県
関西元気文化圏参加事業

《角田川》について

金春康之

《角田川》を今舞うにあたって、心しなければならないと思うこと、まずは、子の行方を求めて登場する母は、物狂いであるということです。吾が子への思いのあまり、気持ちが異常に高ぶり、面白う狂う女なのです。角田川の渡し守とのやり取りも、面白う狂う感じがよく現わされています。悲劇性の強い深刻な曲ですが、子の死を知るまでは、悲しむよりは面白う狂う物狂いの曲だと思います。

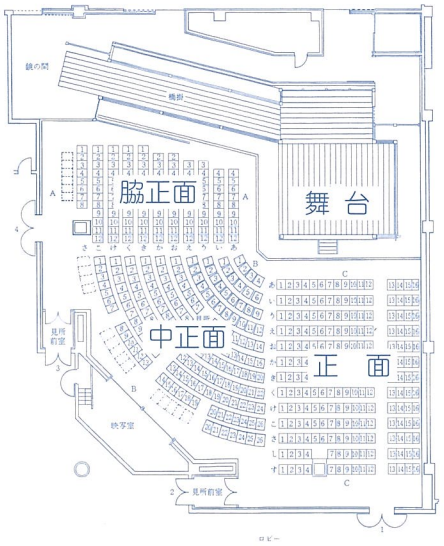
次に、亡霊として現れる子方の有無です。これについては、『世子六十以後申楽談儀』にある元雅と父・世阿弥の会話がよく知られています。世阿弥が、「作り物の塚の中に子供がいないほうがいっそう面白いに違いない。子供は実際に現れるのではなく、亡霊なのだから、それを基準に考えるべきだ」と言ったのに対し、元雅は「私には子方無しではできないだろう」と答えています。元雅の意図しているのは、いまだ素朴な劇としての能であり、世阿弥は、母にしか見えない亡霊であること、またそれは、シテの演技によって描き出す方がより深く幽玄なものになることを、直感していたのだと思います。

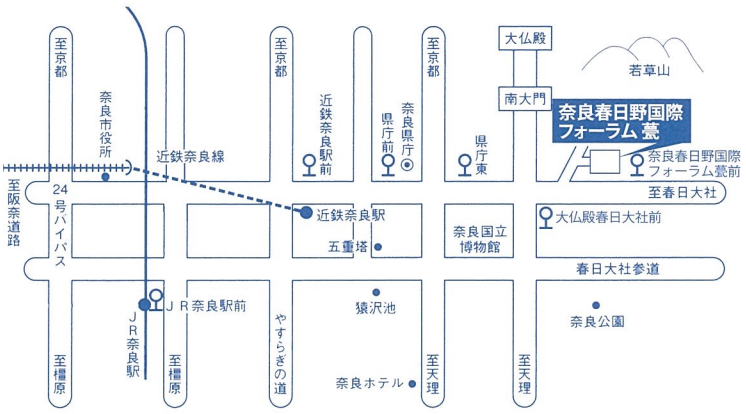
また、元雅は、亡霊を追う母で悲劇感を強め、夜が明ければそれは塚の上の草だった、哀れなことだ、と結ぶのですが、夜が明けてゆく自然を見、目の前の草を見て、悲しみは悟りへと向かってゆくのではないか、と今の私は感じています。元雅は気付いていなかったでしょうけれど。母が泣き崩れて終わるのではなく、違った姿があるのではないかと思います。

金春康之プロフィール

一九五〇年広島生まれ。シテ方金春流第七十九世宗家金春信高師のすすめで奈良に転居し、七歳で金春欣三師に師事。京都大学、大学院を通じてハイデッガーの哲学のなかにある芸術思想を研究し、奈良県立美術館の学芸員を務めていたが、一九九九年に退職し、能に専念。二〇〇一年、重要無形文化財能楽総合保持者に認定。

能楽ホール　座席図





＊感染症対策について、引き続きご協力をお願いします。

＊会場の換気は十分に行われていることを施設に確認しています。

＊当日の演目、出演者に変更がある場合があります。あらかじめご了承ください。